

森に響く 「カンコーの汽車」の音



森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」は、東京・雨宮製作所で製造された初の国産11トン機関車で、道内では唯一の動態保存、すなわち動ける状態で保存されている歴史的文化遺産である。

「雨宮21号」が丸瀬布―武利意間の森林鉄道に配置されたのは1928（昭和3）年。以来、戦中から戦後にかけて、国有林から伐り出した丸太や生活物資を搬送してきた。町の人々は「雨宮21号」を「カンコーの汽車」と呼んで親しんだ。カンコーとは官行、国の汽車という意味である。

1961（昭和36）年、森林鉄道は廃止になり、「雨宮21号」はスクラップという寸前に、地元の人々の要望が実を結んで、北見営林局は丸瀬布町へ払い下げを決めた。

同年5月13日、サヨナラ運転。

ところが1969（昭和44）年春、林野庁の意向で「雨宮21号」は群馬県へ移されることに決まった。驚いた町長や有志のメンバーは、営林局に対して文書で「地元保存」を要請し、700人の署名を集めて、

「木材で走る機関車を残してほしい。森林愛護思想を高める意味からも、ぜひ」

と訴えた。

林野庁は「雨宮21号」を断念し、抜き打ち的に置戸町に保存している機関車を群馬県に移すことにした。こうして「雨宮21号」は1976（昭和